

授業改善に直結する学生授業評価の検討（Ⅱ）

——新学生授業評価アンケート調査の策定に向けて——

田 実 潔
鈴 木 剛
岩 本 一 郎
古 谷 次 郎
後 藤 靖 宏

授業改善に直結する学生授業評価の検討 (Ⅱ) ——新学生授業評価アンケート調査の策定に向けて——

11-12プロジェクト研究報告

田 実 潔
鈴 木 剛
岩 本 一 郎
古 谷 次 郎
後 藤 靖 宏

目 次

- I. はじめに
- II. 目的
- III. 方法
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. 結論としての授業評価案提起
- VII. 今後の課題

I. はじめに

2008年に大学設置基準の一部が改正され、学士課程におけるFDが義務化された。文部科学省(2007)も、高等教育局長通知において「各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。」と各大学に通達をしており、夏目(2008)の指摘を待つまでもなく、各大学においては大学教員の授業改善への取組が進められている。青野(2008)は、教員個人ではなく大学が組織として行う「授業の内容及び方法の改善」とは何かを問いつつ、その重要な手がかりとなるのはそれでも各々の教員による「授業の内容及び方法の改善」であり、学生による授業評価やカリキュラム評価を抜きには行えない、と指摘してお

り、学生授業評価の再検討を提言している。

この学生による授業評価はともすれば双方向性にはならず、学生側からの一方的な教員評価が多く、その意義は認められてきたものの、学生による授業評価を授業改善に反映させる試みはほとんどみられていない(宇佐美1999, 2004)。むしろ学生による授業評価の有効性を否定する研究が多い(吉田2010, 松谷ら2005, 安岡2007, 田実・竹原2008a)。それに対して、田実(2008b)、田実・竹原(2009)、田実・竹原・鈴木・岩本・古谷(2010a)は、隔年で実施されている北星学園大学の学生による授業評価の結果を統計的に詳細に分析比較し、学生による授業評価の妥当性を検証している。

賛否両論ある学生による授業評価であるが、米谷(2009)は、アメリカの教育心理学者であり大学のFDセンターで21年間勤務し300以上の大学で大学授業評価コンサルティングをしたCashin, W. が示した学生授業評価の神話について、日本の大学教員が陥りやすいエヴィデンスのない論拠への指針として紹介している。Cashinによると、1924年から74年間になされた実証研究がレビューされ、学生による授業評価を否定する16の神話

キーワード：授業に関するアンケート調査, 学生の持つ授業イメージ, 授業評価項目

にまとめている (Table 1)。

Table 1 授業評価を否定する16の神話

1. 学生は未熟で経験不足であり気まぐれだから教員評価と授業評価が一致しない。
2. 優れた業績がある同じ専門分野の同じ学部の教員だけが授業の善し悪しが判断でき、同僚の授業を評価できる。
3. ほとんどの学生の授業評価のやり方は、あたたかくフレンドリーでユーモアのある教員が毎年優勝する人気コンテストと変わりが無い。
4. 学生は大学卒業後数年して授業を離れたところから見るようにならないと正確な判定はできない。
5. 学生評価に用いる質問紙は信頼性も妥当性もない。
6. クラスサイズが学生評価に影響を及ぼす。
7. 学生及び教員の性が授業評価に影響する。
8. 授業が何時限になされるかが学生評価に影響する。
9. 必修科目か自由選択科目かにより学生評価が違う。
10. 学生の専攻分野か否かにより学生評価が違う。
11. 授業の配当学年 (1年, 2年, 3年, 4年, 大学院) により学生評価が異なる。
12. 教員の職位 (講師, 助教授, 准教授, 教授) により学生評価が異なる。
13. 成績の高い学生ほど授業と教員を高く評価する。
14. 学生評価には学問領域による違いはない。
15. 1つの総合評価の項目だけで授業効果を正確に測定できる。
16. 学生評価は授業改善に役立たない。

Table 1に示した「神話」のうち、7, 9, 10, 11については、支持する実証研究もあるので考慮すべき、としているが、これら以外については研究により支持されていない、と結論づけている。

また、学生による授業評価の多くは、得点化するなど客観的の数値としては明確であるが、その数値をもって授業改善にどのように反映させていくか、が大きな課題となっていた。松谷ら (2005) は、授業評価アンケートの条件として、実施組織の効率的な運営や専門家の意見をふまえた調査計画およびアンケートの作成、アンケート結果の分析とその検討、担当教員に対する適切なフィードバック、そして学生への情報開示を挙げているが、いずれも教員や事務職員のかんりの労力を必要とするものである。そこで、近年得点評定する評価方法ではなく、自由記述データから学生の思考傾向や授業改善に直結するキー

ワードを抽出するテキストマイニングと呼ばれる手法が用いられるようになってきた (河野2006, 宮田2009, 大塚2003, 鈴木2005)。鈴木 (2005) らが提唱するテキストマイニングを使った「リアルタイム授業評価システム」については、すでにいくつかの大学や研究所等で導入実績があり、田実・鈴木・岩本・古谷・後藤 (2012) は、先行導入大学への視察を行い、その報告を行っている。それによると、『授業改善が進んでいる印象を受けている (大手前大学・大手前短期大学)』ようであったり、『客観的に見つめるきっかけ (名古屋産業大学)』となったり、『学生の授業に対する評価が正確に得られてよい。授業内容に対する安心感が得られる。基礎ゼミに対する正確な評価が得られる。授業内容の改善に役立つ。(京都外国語大学)』など、授業方法や内容の改善に結びつく分析結果が得られることが期待できるようである。一方、課題とする点もあり、評価項目選定にあたる研究を行った上で、学生への質問項目の選定について慎重に検討を重ねていく必要があるとしている。

北星学園大学では、2011年度まで紙媒体での学生による授業評価を行ってきたが、2013年度からは新しい学生による授業評価を行う予定にしており、タイミング的にも「リアルタイム授業評価システム」導入に向けての健闘は時宜を得ていると思われる。

II. 目的

このような経緯から、本研究では「リアルタイム授業評価システム」の採用を前提に、田実ら (2012) が指摘している評価項目の見直しと策定を目的とすることとした。これまでの学生による授業評価が、我々大学教員の授業改善に直接的寄与していると実感しにくい現状を打開し、大学教員が自ら授業改善を進める為の具体的な改善点や改善の為の指針等が得られれば、と考えている。

Ⅲ. 方 法

1. 調査の内容

田実・竹原・鈴木・岩本・古谷ら（2010b, 2011）の先行研究から、大学授業の改善を目指した授業評価アンケート項目についての調査を行った。調査用紙はFig.1に示した。回答者の属性を訪ねるフェイスシートに続き、先行研究から得られた授業改善のための7項目の観点について、それぞれキーワードもしくは簡単な文で3語(文)記入することになっている。フェイスシートの属性質問については、性別・学年・所属学部のみを答えることになっており、個人の特定やプライバシーの侵害等には充分留意している。同時に、収集したデータについても研究以外に用いることや情報の外部への流出等がないよう厳重に管理している。

具体的な質問項目は以下の7点である。

- 観点1：授業充実のために教員ができる工夫や方法として考えられる具体的な内容は？
- 観点2：学生が参加できる授業を展開するために考えられる点
- 観点3：教員の熱意の示し方やコミュニケーションの方法として考えられる点
- 観点4：学生との距離感（例えば親近感）を縮めるために考えられる点
- 観点5：学生自身の受講態度で考えられる点
- 観点6：授業環境など授業中の学生への配慮において考えられる点
- 観点7：授業における規律（約束ごと等）について考えられる点

2. 調査の対象と分析の方法

全学部全学科全学年の学生を対象に、受講人数や受講者を考慮し、いくつかの授業を対象に選定し、授業内において配布回収した(経済学部18名, 文学部39名, 社会福祉学部38名)。回収したアンケート調査は、クロス集計をして、田実ら（2010b, 2011）の先行研

究結果を参考に自由記述の度数の多い上位8記述を抽出した。

大学授業の改善を目指した授業評価アンケート項目についての調査

2011-12 プロジェクト研究
代表者 田実(社会福祉学部)

この調査研究は、学生さんによる大学授業評価を大学教員が自分の授業を改善するために用いるためには、どのようにすればよいかを調査するものです。全、およびが受理している授業についての意見や感想などの調査ではありません。

どんな点や何を改善すれば授業改善に結びつくかという改善ポイントを明らかにするために、学生さんによる授業評価の質問項目で何を聞けば良いか、を明確にする必要があります。そこで、過去の実験データに基づき以下の質問を決定しましたので、それぞれの項目に答えて下さい。

なお、この調査の結果から、個人を特定したりプライバシーな個人の思想や感情、その他の情報などが外部に出ることはありません。上記研究目的にのみ使用し、データの管理は厳重に行います。まず、以下についてお答え下さい該当する項目を○で囲んで下さい。

性別(男 ・ 女) 学年(1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ その他)
学部(経済学部 ・ 文学部 ・ 社会福祉学部 ・ 短大部 ・ その他)

- 1 -

以下の観点について授業改善のために教員に求める点は何でしょうか。キーワードもしくは簡単な文で3語(文)で答えて下さい。

- 観点1：授業充実のために教員ができる工夫や方法として考えられる具体的な内容は？
①
②
③
- 観点2：学生が参加できる授業を展開するために考えられる点
①
②
③
- 観点3：教員の熱意の示し方やコミュニケーションの方法として考えられる点
①
②
③
- 観点4：学生との距離感(例えば親近感)を縮めるために考えられる点
①
②
③
- 観点5：学生自身の受講態度で考えられる点
①
②
③
- 観点6：授業環境など授業中の学生への配慮において考えられる点
①
②
③
- 観点7：授業における規律(約束ごと等)について考えられる点
①
②
③

以上です。ご協力に感謝します。教員も学生も納得できる授業評価の作成を目指します。

- 2 -

Fig.1 授業評価に関するアンケート調査用紙

IV. 結 果

クロス集計の結果、自由記述での解答が多かった内容について、Table 2にまとめた。

Table 2 解答度数の多い記述

1. 板書や黒板の使用に関する記述
2. 声の大きさや話し方に関する記述
3. 私語あるいは私語対応に関する記述
4. 資料などの配布物に関する記述
5. 授業の形式に関する記述
6. 説明の仕方や説明の分かりやすさの記述
7. 授業の進行具合に関する記述
8. 授業の構成に関する記述

5. 授業の形式に関する記述では、学生参加型などの学生が参加できるかどうかに関する記述であり、7. 授業の進行具合は教員の話し方のスピードやパワーポイントや板書の速さに関する記述である、8. 授業の構成は、7. 授業の進行具合と紛らわしい表記であるが、授業全体の構成に関する事柄で、休憩を設けているとか、討論などのアクティビティがあるか、等の記述であった。

1. 全体の傾向

これらの記述内容について、全体の傾向をFig.2に示した。

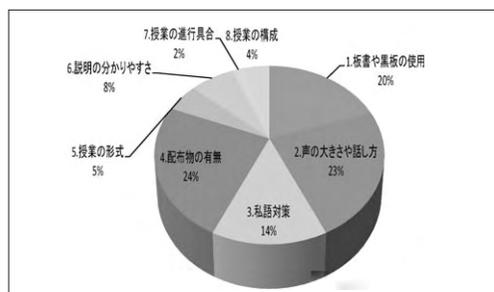


Fig.2 記述内容の全体の傾向

全体の傾向としては特に顕著な傾向は見られなかった。今回用いたこれらの質問項目が、すでに先行研究で特定された大学授業改善に

関する質問項目であったことから、どの内容も学生にとっては蓋然性のあるものであり当然の結果であろう。

2. 学部ごとの傾向

次に学部ごとの傾向についてFig.3に示した。全体傾向同様、有意な特徴は認められなかったが、経済学部で3. 私語あるいは私語対応に関する記述が少なく、文学部では4. 資料などの配布物に関する記述、社会福祉学部では2. 声の大きさや話し方に関する記述が多い傾向にあった。

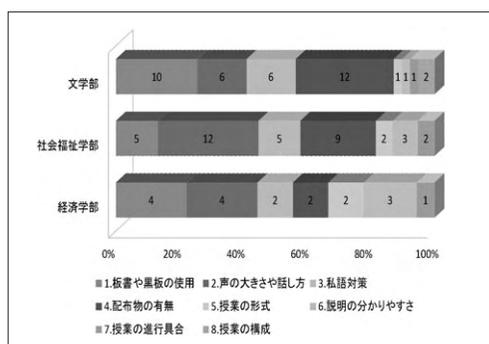


Fig.3 学部ごとの傾向

3. 学年による傾向

学年ごとの傾向はFig.4に示した。傾向としては、学年別に見ると、1年生は7. 授業の進行具合に関する記述、つまり授業のスピードに関する指摘が多いのに対し、学年が上がるにつれてそうした指摘は減っていく。また、「板書」や「声」についての1. 板書や黒板の使用に関する記述や2. 声の大きさや話し方に関する記述 学年に関しては学年に関係なく指摘が多い傾向がうかがわれた。

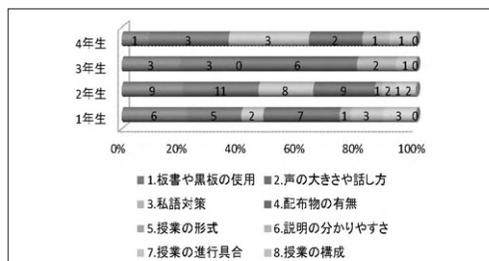


Fig.4 学年ごとの傾向

4. 性別による傾向

性別による傾向については、Fig.5に示した。男女別の傾向としては、男子学生に比べ女子学生の方が2. 声の大きさや話し方に関する記述つまり声の聞き取りやすさへの指摘が多い傾向が見られた。

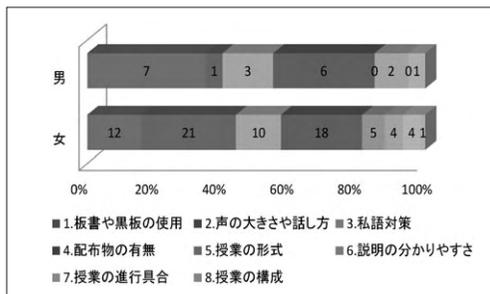


Fig.5 学生の性別による傾向

V. 考察

本研究では、田実らの先行研究（2010b, 2011）における因子分析結果に基づいて質問紙を作成している。先行研究では授業評価項目に関する因子が8因子抽出されており、それに基づいた質問によるアンケート調査であった。得られたデータの結果はすでに示したが、これらの結果を解釈し、本学で2013年度から取り組む新しい授業評価アンケートの項目を提起するためのプランを策定する必要がある。

結果を総合的に解釈し、先行研究の因子分析結果から得られた知見を加味しながら、北星学園大学の授業評価アンケート調査は、Fig.6に示すような4領域での質問とすることが望ましいと思われる。

『環境や方法について』

これは、授業を円滑に進める方法論や教室環境や授業中の注意喚起などの授業環境の整備を表している。教員が教科書や配布プリント、視聴覚教材（Moodleやe-learning, プレゼン等）等を授業の中でどれだけ有効に活用しているかといった点や、私語や迷惑行為

への適切な対応を教員がどれだけ行っているか等の配慮している点等である。北星学園大学では、授業の少人数化が進んでいる一方、100人以上の大教室での授業もまだまだ多いのが現状である。出席している学生の授業への要求レベルやモチベーションも異なるなかで、授業内容だけでなく、我々教員は、学生の授業への取り組み姿勢や学ぶ態度育成を支援する配慮や方法を考えねばならない。

『授業内容について』

田実らの先行研究（2010a）では、北星学園大学の学生が大学授業に望んでいる要素のうち、教員や大学職員よりも有意に重視していたのが授業内容の充実であった。このことにも鑑み、事前情報としてのシラバスとの整合性や専門性や最新の研究成果等を反映した授業内容になっているかが問われるべきであろう。

『教員について』

授業を双方向性のある知的伝達行為ととらえた場合（田実2010c）、教員に求められるのは教員の人となりやキャラクターではなく（田実2010b）、双方向性を担保した伝達の技術であり、伝えようとする熱意や意欲であろう。このことから、教員に対して学生の理解を深めるような双方向性のある知的伝達行為として授業を行っているかどうか、あるいは自分自身が授業を楽しみながら意欲的に行っているかどうか、といった点が問われている。米谷（2009）が紹介している大学教員の持つ学生による授業評価に対する誤解点によれば、『ほとんどの学生の授業評価のやり方は、あたたかくフレンドリーでユーモアのある教員が毎年優勝する人気コンテストと変わらない』といった考え方があたたかも真実であるかのように主張する教員は今でも存在する、と指摘している。

『学生自分自身について』

学生からの授業評価に対して、教員側からよく聞かれる反論の声の代表的なものに、学

生自身の問題を指摘する声がある。つまり、一部分の、授業に積極的でなかったりネガティブな感情や気持ちを持っている学生あるいは授業参加態度（欠席が多い、私語が多い、居眠りばかりしている、授業に集中していない等）の良くない学生からの評価が本当に授業評価として妥当性を持つのか、といった指摘である。履修学生数が多ければ多いほどこ

の感覚は理解できるものと思われる。この指摘に対して、田中・藤田（2003）は、授業評価は教員のみでの授業取り組みの結果ととらえるのではなく、授業が学生との相互関係から成立すると位置づけた上で、学生の心理的特性つまりどのような心理特性を持つ学生が受講しているか、といった受講学生の事項評価も同時に行うべきである、としている。

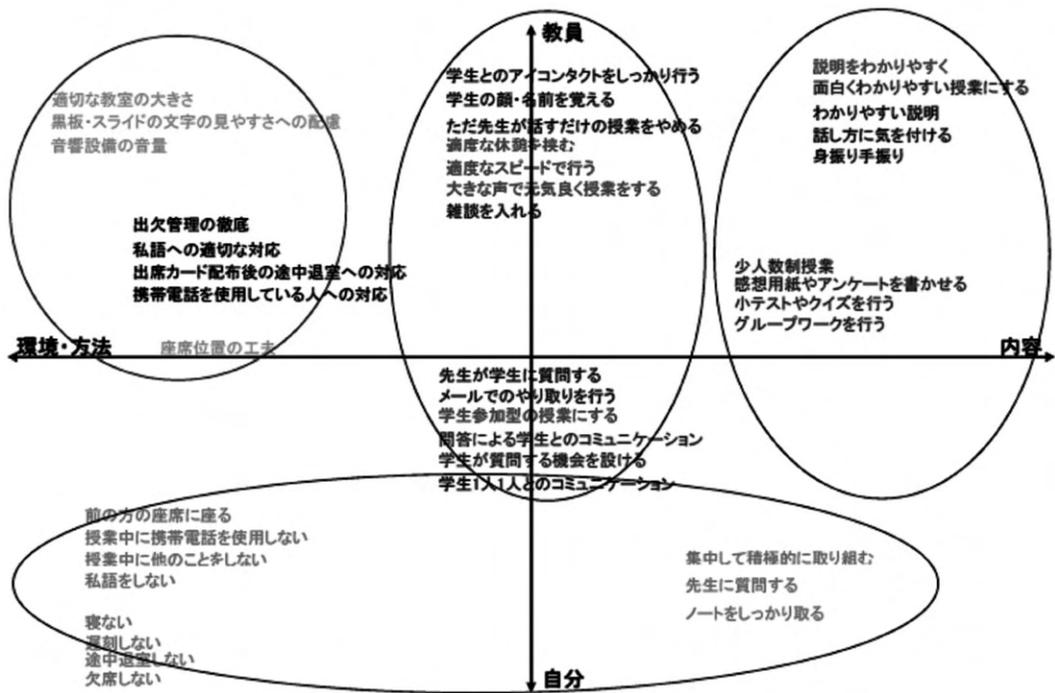


Fig.6 授業評価の主要な4領域

VI. 結論としての授業評価案提起

以上の結果と考察に加え、学生が実際に授業評価を行う際に、新しい授業評価システムに必要な要素は、「授業内で、スマホを使用し、10～15分程度で回答する」ことができる質問内容であることが求められている。そこで、従来北星学園大学が行っていた5件法選択に

よる学生による授業評価項目を、本研究で示した4領域に分類し各領域で選択問題を2問ずつと精選することとした。その上で新しい授業評価の目玉である「リアルタイム授業評価システム」による自由記述解答式の問題も付け加え、FD委員会にて審議し、実際の授業評価となった授業評価案を Table 3 に示した（フェイスシート除く）。

Table 3 授業評価原案

I. 以下の質問に答えて下さい。5件法での選択と自由記述があります。

※〔5. そう思う, 4. どちらかといえばそう思う, 3. どちらともいえない, 2. どちらかといえばそう思わない, 1. そう思わない〕

『環境や方法について』

①教材（教科書・配布プリント・視聴覚教材・Moodleやe-learning教材・プレゼン教材等）は適切でしたか？

②授業担当者は授業中の良好な環境維持（Ex.私語や迷惑行為等への対応）に適切に対応しましたか？
授業環境や授業の進め方（方法）についてどのように感じましたか。感じたことや改善を求める点について自由に記述して下さい。

『授業内容について』

③授業は講義要項（シラバス）の趣旨と内容に沿って展開されましたか？

④その領域への興味、関心が高まりましたか？

授業の内容についてどのように感じましたか。感じたことや改善を求める点について自由に記述して下さい。

『教員について』

⑤授業の内容を理解できるような工夫や進め方がされていましたか？

⑥授業担当者の伝えようとする気持ちや意欲は感じられましたか？

担当教員の授業への取組みについて、どのように感じましたか。感じたことや改善を求める点について自由に記述して下さい。

『学生自分自身について』

⑦あなた自身の授業への出席状況は良かったですか？

⑧必要な場合の予習・復習や授業時の集中など、あなたの取組態度は意欲的でしたか？

あなた自身のこの授業への参加態度や意欲等についてどのように感じていますか。また他の受講学生に対して何か感じたことはありましたか。感じたことや改善を求める点について自由に記述して下さい。

『総合評価』

⑨総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか？

VII. 今後の課題

北星学園大学は、2013年度から本研究結果に基づいた、学生による大学授業改善のための授業評価を始めている。本原稿執筆時点では、個々の授業に対する評価内容のフィード

バックが各教員に提供されている。この評価に基づく情報を、今後の授業改善にどのように用いていくかは、データの理解や解釈とともに、評価システムや全体としての評価傾向や個々の授業だけではなく各教員が展開しているすべての授業における授業改善点の整理

など、得られた授業評価ローデータをどのように再分析していくか、が今後の大きな課題となってくるであろう。林(2009)は、学生による授業評価の結果と教員自身による自らの授業評価の結果を比較分析し、教員が直観的に「うまくできた」あるいは「ダメだった」と感じる(評価する)授業については、ほぼ学生による授業評価と一致する傾向があることを示しているが、このような感覚的な要因ではなく、客観的にエビデンスのあるデータと分析を基にした授業評価と授業改善が進むことが望まれる。

同時に、「リアルタイム授業評価システム」について、田実ら(2012)が視察結果を報告しているように先行大学における課題や問題点を踏まえた上で、この学生による授業評価が有機的に機能していくことが今後の課題となろう。奇しくも田中ら(2003)は、教員が良い授業を展開していくことが学生の受講態度につながるという因果関係を指摘している。この学生による授業評価が単なる一方的な授業評価に終わるのでなく、教員の今後もっと良い授業を展開していこうとする自覚的な授業改善意欲へと直結していける評価になっていくことを願ってやまない。

謝 辞

本研究は北星学園大学2011～2012年のプロジェクト研究の補助を受けており、その研究成果発表である。感謝とともに報告致します。また、本研究は2011～2012年度教職部門FD研究を兼ねています。

文 献

文部科学省大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について(2007):文部科学省高等教育局長通知(文化高第281号,平成19年7月31日)
夏目達也(2008):FD実施義務化が提起しているもの一諸外国との比較による若干の知見一、大学教育学会2008年度課題研究集会要旨集, 38-39.

青野透(2008):大学設置基準における「授業の内容及び方法の改善」が意味するもの、第11回日本高等教育学会Ⅱ-7部会, 120-121.
宇佐美寛(1999):大学の授業、東信堂, 166-176.
宇佐美寛(2004):第6章学生による授業評価の概念分析、大学授業の病理—FD批判—、東信堂, 109-146.
吉田雅章(2010):学生による授業評価は廃止すべき、第16回大学教育研究フォーラム, 86-87.
松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦(2005):全学共通教育の現状と課題—学生による授業評価アンケート調査の分析から—、大学教育研究ジャーナル, Vol2, 13-25.
安岡高志(2007):学生による授業評価の進展を探る、京都大学高等教育研究Vol13, 73-87.
田実潔・竹原卓真(2008a):学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究—学生が望む授業づくりに向けて—、北星学園大学社会福祉学部論集, vol45, 37-43.
田実潔(2008b):学生による授業評価と授業改善—学生評価の再分析から—、第30回大学教育学会発表論文集, 106-107.
田実潔・竹原卓真(2009):学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究(Ⅱ)—学生が望む授業づくりに向けて授業評価アンケートの分析から—、北星学園大学社会福祉学部論集, vol46, 65-72.
田実潔・竹原卓真・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎(2010a):学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究(Ⅲ)—過去3度のアンケートの縦断分析から(2003～2007)—、北星学園大学経済学部北星論集, vol49(2), 1-16.
田実潔(2008c):教職志望学生が求める大学授業、日本教師教育学会第18回研究大会発表論文集, 112-113.
松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦(2005):全学共通教育の現状と課題—学生による授業評価アンケート調査の分析から—、大学教育研究ジャーナル, Vol2, 13-25.
米谷淳(2009):学生授業評価の神話に関する仮説検証、京都大学高等教育研究開発推進センター第15回大学教育研究フォーラム, 44-45.
河野康成(2006):テキストマイニングを利用した大学生の意識調査、数理システムユーザー・コンファレンス2006論文集, CR1-13-CR1-14.
宮田仁(2009):ケータイ対応コメントカードシステムとテキストマイニングを活用した学生

- 参加型双方向学習環境の構築とその効果(1).
サイエンティフィック・システム研究会2009
年度教育環境分科会, 1-11.
- 大塚一徳 (2003) : 携帯電話を利用したリアルタイム授業評価システムの実験的運用, 2003PCカンファレンス論文集, 283-286.
- 鈴木賢治 (2005) : 大学経営を変える「リアルタイム授業評価システム」. ITソリューションフロンティア4月号, 10-13. 野村総合研究所.
- 田実潔・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎・後藤靖宏 (2012) : 授業改善に直結する学生授業評価の検討（Ⅰ）—テキストマイニングを使ったリアルタイム授業評価システム導入例の視察結果—. 北星学園大学文学部文学部北星論集49(1), 45-53.
- 田実潔・竹原卓真・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎 (2010b) : 学生や教員, 職員が望む大学授業に関する研究（Ⅰ）—3者に対するアンケート調査から—総集編—. 北星学園大学文学部北星論集, vol48 (1), 15-22.
- 田実潔・竹原卓真・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎 (2011) : 学生や教員, 職員が望む大学授業に関する研究（Ⅱ）—北星学園大学で学ぶ学生の傾向（性差・学年差・学科間差）—. 北星学園大学社会福祉学部北星論集, vol4, 15-25.
- 田実潔 (2010c) : 教師を目指す学生必修（1年次担当）「教職入門」の授業実践. 小田隆治・杉原真晃編, 学生主体型授業の冒険. ナカニシヤ出版.
- 田中あゆみ・藤田哲也 (2003) : 大学生の達成目標と授業評価, 学業遂行の関連. 日本教育工学会論文誌, vol27(4), 397-403.
- 林創 (2009) : 学生の授業評価と教員自身の授業評価の一致と不一致. 第15回大学教育研究フォーラム, 40-41.

[Abstract]

The Examination of the University Lecture Improvement Evaluation by Students II

Kiyoshi TAJITSU
Tsuyoshi SUZUKI
Ichiro IWAMOTO
Jiro FURUYA
Yasuhiro GOTO

We are looking for a new form of university lecture evaluation that students perform. Because we checked that “the real-time lecture evaluation system” using cell-phones was effective, we decided to do field work at a university that has already introduced this system. We also administered a questionnaire survey on university lectures to students of Hokusei at the same time. From the results of previous studies and the results of this survey, we decided to propose the idea of a new version of student evaluation of teaching.

We have to plan to examine it to continue whether it was effective.

Key words : The Questionnaire Survey of University Lecture, Lecture Images with Students, Teaching Evaluation Items